主の晩餐の愛に
応えて生きる

Ⅰコリント11章17～34節
2021年8月29日
松田 基子 師

私達は、教会に来て、イエス・キリストの十字架に依る人類の贖いの福音を聞き、自分たちがどういう存在なのかを知りました。
『神さまに愛され、命と使命を与えられ、
神さまに聞き従って生きる様に』と、
この世に送り出された存在です。 それにもかかわらず、その生き方は、自己中心で、神さまも、他者も愛せず、神さまに背き、自己中心に生きるために、罪を産み出す生き方しか出来ていません。

その罪は自分で償えるものではありません。
そのため、
『自分の行く先は、永遠の滅びである』
という事を知りました。 私達には絶望しかありませんでした。 ところが、イエス・キリストは人間自身で償い得ない罪を、罪なき神の子の身に一身に負って、
『身代わりの十字架に架かり、
人類の罪を贖って下さった』
のです。

神さまはその、御子イエス様の十字架の贖いを受け入れて、イエス・キリストによって、人類の**罪を赦す**その証明に、イエス様を十字架の死から3日目に、**復活**させられました。 永遠の滅び以外に、行く道がなかった絶望の人類に、イエス・キリストが救いの道を開いて下さいました。そこで人間は、イエス・キリストを信じ、共に歩いて、**天の御国に辿り着く**ことが出来る様になったのです。 この信仰は、私達の生も死も、存在の**全てを保証**するものであり、**命よりも大事**なものです。

私達はその偉大な価値を知って、イエス・キリストを信じ、残りの生涯はイエス・キリストの御救いの愛に応えて、キリストを主とし、キリストに従い、キリストに倣う生き方をしていく事を決心して、洗礼を受け、キリストの身体である教会に、迎え入れられました。

それは、神の子とされた、何ものにも勝る喜びでした。 しかし、信仰生活が長くなりますと、その救いの恵みに慣れてしまい、教会に来ていても、心はキリストに聞き従うよりも、自分の考え、自分の思い中心の信仰生活になってしまうのです。 それはだれにも起こり得ることです。

イエス様は、その事を良くご存知でした。
イエス様は常に、そこから立ち帰るために、晩餐と言う素晴らしい恵みを私たちに命じて、天の御座にお帰りになりました。 さて、今学んでいますコリント教会は、世俗の直中で、世俗に流されている教会でした。 信仰的判断がなかなか出来なくて、パウロを困らせた教会です。
何故、信仰的な問題が次々に起こるのでしょうか。 それは自分自身の存在が、どういうものなのか、イエス・キリストが自分の為に、どれ程偉大な事をして下さったのか、それを忘れて、自分流の信仰になってしまうからです。

パウロはそういう人達に対して、イエス様の十字架に目を向けさせました。 コリントⅠの手紙11章17節から、パウロは
「**次のことを指示するにあたって、わたしはあなたがたをほめるわけにはいきません。 あなたがたの集まりが、良い結果よりは、むしろ悪い結果を招いているからです。**」と、
言っています。

イエス・キリストの御名の許に開かれる集まりなら、それは主の霊が働かれ、集う全ての人が、主が共におられる事が感じられる集まりであるべきです。 それが、悪い結果を招くような集りになったとは、どんな集まりだったのでしょうか。 18節に、
「**あなたがたが教会で集まる際、お互いの間に仲間割れがあると聞いています。 わたしもある程度そういうことがあろうかと思います。あなたがたの間で、だれが適格者かはっきりするためには、**」
詳訳聖書では、
「**真実な、良いと立証された人々か、はっきりする為には、仲間争いも避けられないかも知れません。**」
と訳されています。しかし、20節に、
「**それでは、一緒に集まっても、主の晩餐を食べることにはならないのです。**」

と言っています。

間違った事に対して、真理を訴えていくことは大切です。 しかし、それで仲間争いになってしまい、心では敵対していながら、集会に一緒に集まり、そこでは一体であることを表す主の晩餐を行っていたのです。 そこでパウロは、

『あなた方は、確かに主の晩餐を行っているけれども、それは、主の晩餐の意味をなしていない。』

と指摘しています。

21節に、

「**なぜなら、食事のとき各自が勝手に自分の分を食べてしまい、空腹の者がいるかと思えば、酔っている者もいるという始末だからです。**」と、

言っています。 1世紀中頃の教会は、まだ、礼拝の形も整っていませんでしたし、礼典も今の様に整理されたものではありませんでした。
使徒達の教えに従って、礼拝を献げましたが、彼らは、日曜日を、主が復活された主日として守り始めました。

日曜日1日だけではなくて、何日か夕方から集まって礼拝をしました。 それは、文字通りイエス様の最後の晩餐を再現するものでした。
一説によりますと、

『最初にパンを裂き、それから愛餐会をして、最後に制定語が語られて、ぶどう酒を飲むと言うやり方でした。』

ところで、初代教会時代の教会は、現在の私たちのように、会堂を建てて、そこに集まって礼拝を献げるというものではありませんでした。 邸宅を持った裕福な信徒が、教会としての場所を提供しました。 当時の富裕層は、ゆったりと寝そべって食事が出来る特別な食堂を持っていました。 そこには約9名くらいが入れたそうです。
その前には、広い中庭があって、30～40人が入れる広さだったそうです。 当時の社会は、階級社会でした。 問題は社会的身分が、教会の中にまで持ち込まれてしまった事です。

裕福な人たちは、時間もあり、余裕がありますから早くから集まり、立派な食堂を占領し、それぞれ御馳走を広げました。 彼らはお酒を飲みながら、食事を楽しみました。 21節の岩波訳では、

「**各々が、自分自身の晩餐を、我先に採って食べ、**」

と訳されています。 そこには、イエス様に対する思いも、弱い人への思いやりも、少しも感じられません。 あげくの果ては、酔っ払っている始末です。

中庭の方に目を移しますと、そこには1日働き詰めで、疲れ切った解放奴隷や、奴隷の人たちが礼拝したい一心で、空腹を抱えて集まっていました。 パウロはそういう情況を伝え聞いて、22節に、

「**あなたがたには、飲んだり食べたりする家がないのですか。 それとも、神の教会を見くびり、貧しい人々に恥をかかせようというのですか。**」

と、語気を強めて、真剣に富める信徒たちの信仰態度を問い正しています。

彼らの家庭では、何時も豊かな食事がありました。 彼らに食事をする家がなかった訳ではありません。 そこをパウロが敢えて正したのは、彼らがキリストの愛を忘れ、同信の者への愛の配慮に欠けていたからです。 1世紀の社会では、市民権を持った裕福な人々は、贅沢な食事をしても、奴隷達に与えられることはありませんでした。 社会がどうあろうとも、富める者も、貧しい者も、市民権の有る者も、奴隷も、同じ罪人であり、同じイエス・キリストの十字架の血に依る贖いで救われ、**キリストに結ばれた**有機的な関係なのです。 その**一体性**を**具現**するのが**教会の使命**です。 それなのに、自己満足の食事に耽るなどとは、実に神さまを恐れない行為であり、それは貧しくて家がなく、食物を持って来れない人々に、恥を掻かせている事になるのです。

パウロは主の晩餐を、私物化している人々に、晩餐の意味を思い起こさせています。23節に、

「**わたしがあなたがたに伝えたことは、わたし自身、主から受けた事です。**」

初代教会はイエス様の最後の晩餐を繰り返すことで、イエス・キリストの救いを確信し、その使命に立ちました。 主イエスは引き渡される夜、

「**パンをとり、感謝の祈りを捧げてそれを裂き、『これは、あなた方のためのわたしの体である。 わたしの記念として、この様に行いな**

さい。』」
詳訳聖書では、
「これはあなたがたのために裂かれるわたしの体です。 わたしを愛情をもって覚えるために、このように行いなさい。」
と訳されています。

神の御子の体が、裂かれなければならない、それは人類の救済の為に、父なる神さまのお考えによるものでした。 ヘブライの信徒への手紙10章5節には、
「キリストは世に来られたときに、次のように言われたのです。
『あなたは、いけにえや献げ物を望まず、むしろ、わたしのために、体を備えてくださいました。』」
そして、14節に、
「キリストは唯一の献げ物（ご自身の体）によって、聖なるものとされた人たちを永遠に完全な者となさったからです。」
とあります。

イエス様が体をもって、人の世に生まれてこられたのは、その身に全人類の罪を引き受け、神の子の体を差し出して、全人類の罪を贖う為でありました。 ですから、一つのパンが裂かれて、分けられる事は、イエス様が私達の罪の為に、ご自身の体を十字架に差し出され、ご自身の肉を裂いて、罪の贖いをして下さったことを思い起こさせるためのものなのです。 最後の晩餐である、過越の食事では、その後に羊の肉を食べました。コリント教会でも、この時に食事をしました。 そして最後に、杯に注がれたぶどう酒を飲みました。 その時、語られた言葉は25節の、
「杯も同じようにして
『この杯は、わたしの血によって立てられる新しい契約である。 飲む度に、わたしの記念としてこのように行いなさい。』」
でした。

最初の古い契約と言いますのは、出エジプト記24章7節で、
「モーセが契約の書を取り、民に読んで聞かせた。 彼らが
『わたしたちは主が語られたことをすべて行い、守ります。』
と言うと、モーセは血を取り、民に振りかけて言った。
『見よ、これは主がこれらの言葉に基づいてあなたたちと結ばれた契約の血である。』」
とあります。

この様に当時、契約を結ぶ時には、動物犠牲の血をもって、契約を成立させました。
しかし、イスラエルは、律法を守る事が出来ず、契約を破ってしまいました。 神さまはそれで、イスラエルを見捨てて、滅ぼされたかと言いますと、そうではありませんでした。 神さまは、なおなおイスラエルに愛を注ぎ、エレミヤ書31章31節から、新しい約束をお与えになりました。
「見よ、わたしがイスラエルの家、ユダの家と新しい契約を結ぶ日が来る、」
つづいて、33節に、
「わたしの律法を彼らの胸の中に授け、彼らの心にそれを記す。 わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。」
34節に、
「わたしは彼らの悪を赦し、再び彼らの罪に心を留めることはしない。」
と約束されました。

その預言が、イエス様が十字架に架かり、血を流して下さったことによって、成就したのです。晩餐のぶどう酒は、イエス様が人類の贖いのために流された十字架の血を現し、罪の赦しが与えられた、新しい契約を意味しました。 また、ここで、イエス様は晩餐を記念として行いなさいと命じられました。それは遠い昔に「こう言うことがあった」という、懐かしむ様なものではありません。イエス様の晩餐は、十字架の贖いの事実、その事によって、イエス様に依る新しい契約が今、有効に働いていること、その事を追体験して、イエス様に対する愛、信仰の確信、信仰の応答を成していくものなのです。

26節に、
「だから、あなたがたは、このパンを食べこの杯を飲むごとに、主が来られる時まで、主の死を告げ知らせるのです。」
と命じられています。 イエス・キリストの十字架の贖いによる御救いは、自分たちの喜びに止めて於いて良いものではありません。 晩餐の度にイエス様が私達の為に裂かれた体、流された血を思うと、このイエス様の愛を、一人でも多くの

人に伝えずにはおられなくなる筈です。

キリスト者は、再臨の主を待ち望んで、十字架の贖いの死を伝えて行く責任があります。 主の晩餐は、それ程の愛を注がれた、イエス・キリストの愛を現すものでありますから、教会は、キリストの愛を具現化する場でなければなりません。
それなのに、コリント教会の晩餐はまったく愛のない、聖霊の一致のないものになっていました。
そのために、パウロは激しく叱責して、
27節に、

「**従って、ふさわしくないままで主のパンを食べたり、その杯を飲んだりする者は、主の体と血に対して罪を犯すことになります。**」と

言って、先の自己満足の晩餐をしている人たちへ注意を与えています。 続いて29節に、

「**主の体の事をわきまえずに飲み食いする者は、自分自身に対する裁きを飲み食いしているのです。**」

と警告を与えています。
しかし、パウロはまた、彼らに悔い改めの機会を与えて、32節に、

「**裁かれるとすれば、それは、わたしたちが世と共に、罪に定められることがないようにするための、主の懲らしめなのです。**」と、

言っています。決定的な、永遠の滅びに行く事が無いように、悔い改めて、主に立ち帰ることが与えられていると言っています。 どこまでも主が悔い改めの機会を与え、愛を注いでおられる事を語っています。

そして、33節に、

「**わたしの兄弟たち、こういうわけですから、食事のために集まるときには、互いに待ち合わせなさい。**」と、

パウロはコリント教会の晩餐を、今日の聖餐式に近づけるように、導いています。 2世紀の中頃には、食事とは完全に切り離され、聖餐と呼ばれるようになりました。 聖餐式は、何よりも教会がイエス・キリストの十字架の贖いによって救われた共同体である事を言い表すものです。

教会は**聖餐共同体**なのです。 その事による**愛の一致を現していかなければなりません。**
そこで、一人ひとりは、イエス・キリストの十字架の贖いによって与えられた御救いをうけながら、

『その愛に応える生き方をしてきたかどうかを**自己吟味**し、主の前に悔い改め、十字架の血を仰いで、赦しの宣言を聞いて、また、**新しく力を頂いて、出発**するのです。』

信仰生活に於いて聖餐はなくてはならない、主からの命令であり、**力で**あり、**恵み**です。

私達は改めて、聖餐の**恵みを感謝**し、教会は**聖餐共同体**である事を覚えて、一体となってキリストの十字架の**贖いの愛**を具体的に現していく事に心を用いて参りましょう。

お祈りを致します。
恵み深い天の父なる神様

イエス様は、私達を永遠の滅びから救うために、私達の罪の全てを一身に負って、身代わりの十字架に架かり、体を裂き、血を流して下さいました。

これ程に大きな愛を受けながら、なお、自己中心になりがちな私達をお赦し下さい。 主に従っていくために、聖餐を制定して下さったことを有難うございます。

私達の教会が、名実共に主の愛に応える聖餐共同体となりますよう、聖霊の助けと導きをお与え下さい。

尊い救い主イエス・キリストの
お名前によってお祈りを致します。
アーメン。